

早期アユ苗の漁獲状況とアユの資源状況について

1. 早期アユ苗の漁獲状況

(1) 漁獲量

- ・12月1日に始まったエリ漁によるアユ苗の早期漁獲はかなり順調に推移し、12月5日までに注文量の約27.5トン(27,534.5kg)を漁獲して終了した。
- ・12月1日から漁獲を始めるようになった平成21年以降、最も早く注文量を達成した。
- ・台風18号の河川大増水による卵の流出等の影響が懸念されていたが、その影響は大きくなかったと考えられる。

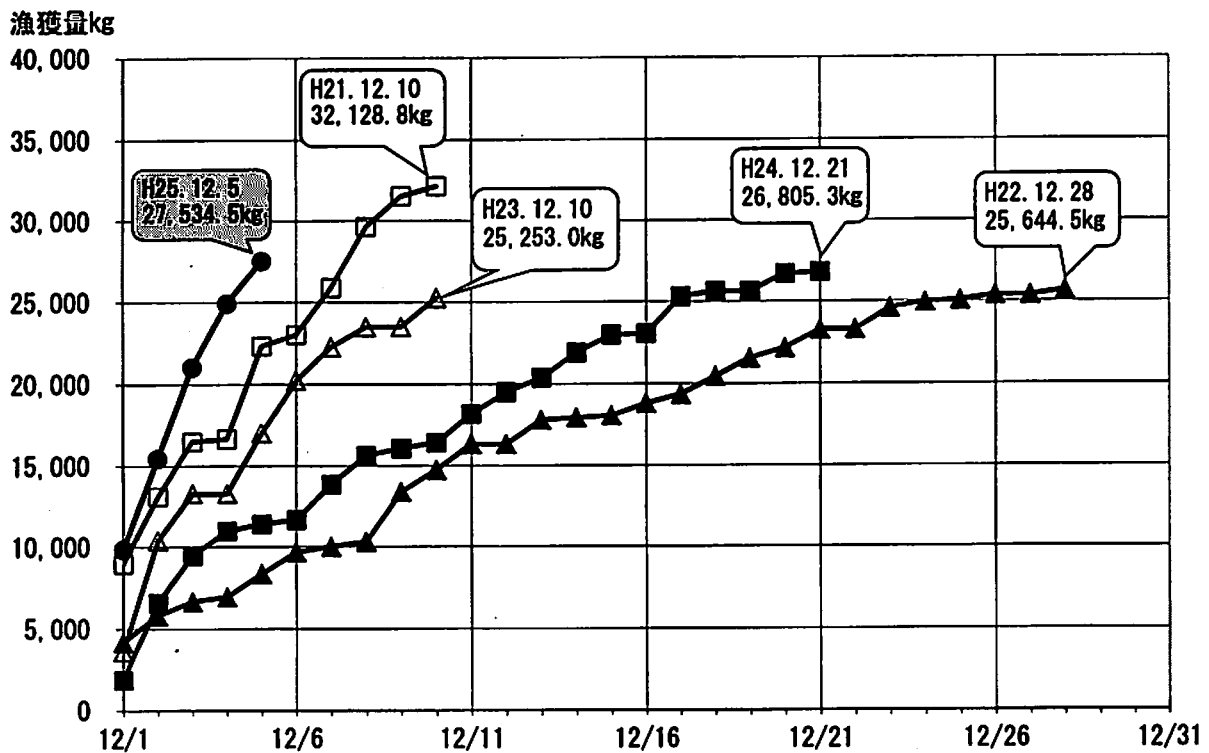


図1 早期アユ苗の累積漁獲量

(2) 漁業者からの聞き取り

- ・漁獲は少ないと思っていたが、琵琶湖全体で順調に漁獲できた。
- ・やや大きめのアユが混じっているが、全体としては良いサイズであった。
- ・アユは岸よりに多かった。

(3) 早期漁獲が好調であった理由

- ・本年は産卵傾向が早期に集中したため、早期漁獲が好調となったものと考えられる。

2. アユの資源状況

(1) アユの産卵量

- ・今年(平成25年)の県内主要天然河川におけるアユの産卵量は45.1億粒で平年値111.4億粒の40%となった(去年は平年の6%)。

※主要11河川の河床の砂利に産み付けられた卵を計数し、産卵面積を確定して算出

- ・産卵は平年より早い8月下旬から始まり、9月下旬にはほぼ終了した。
- ・9月下旬以降の産卵量は、平年に比べてかなり少なかった。
- ・今年(平成25年)の産卵量は平成15年から17年並みであったが、9月中旬の姉川では増水で部分的な調査となったことから、さらに多くの産卵があった可能性がある。
- ・台風18号の増水による卵の流出、濁水による稚魚の生残率低下が懸念された。

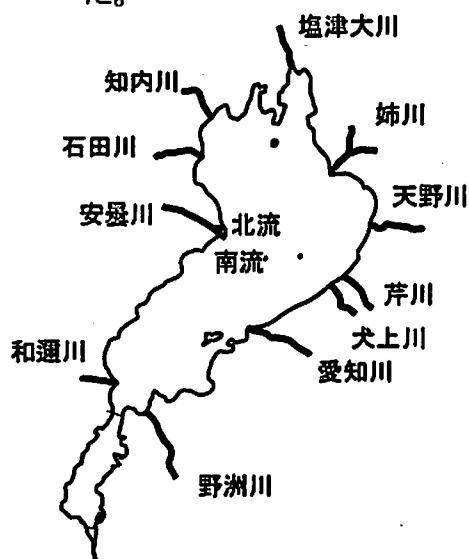


図2 調査河川

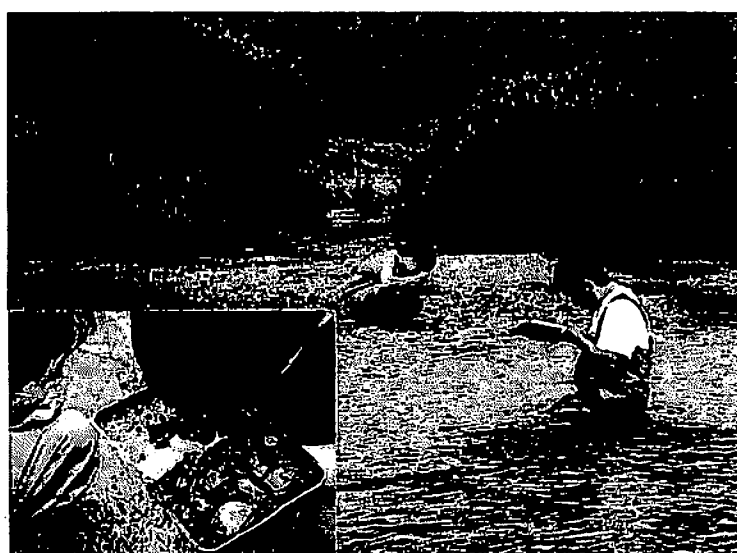


写真1 調査風景

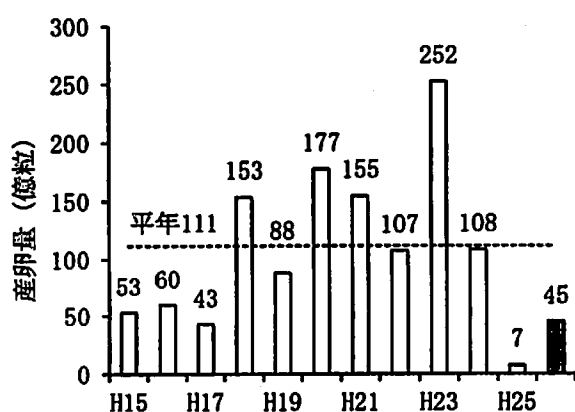


図3 天然河川産卵量の経年変化

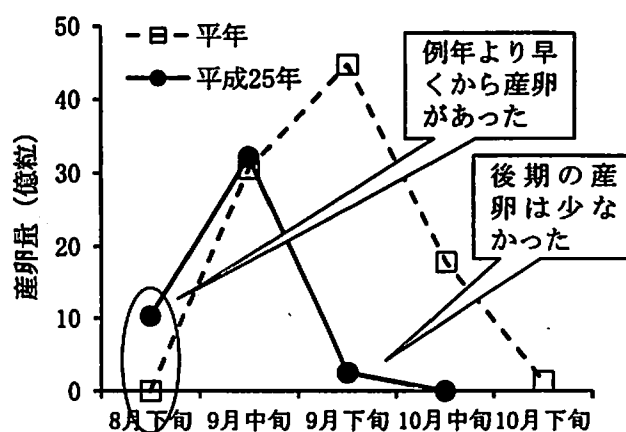


図4 天然河川での時期別産卵量

(2) 人工河川からのアユの流下量

- ・ 8月29日から10月4日にかけて、平年の12トンより11トン多い23トンの親魚を放流した（昨年は追加放流を含め約19トン）。
- ・ ふ化したアユの流下は9月11日に始まり、9月30日にピークとなり、10月22日に終了した。
- ・ 天然産卵が少なかった9月下旬以降に多くのアユを流下させることができた。
- ・ 今年的人工河川からのアユの流下量は、平年の約24億尾より約14億尾多い37.8億尾となった（昨年は34億尾）。



写真2 安曇川人工河川(提供：水資源機構)



写真3 親魚の放流



写真4 人工河川に放流された親魚

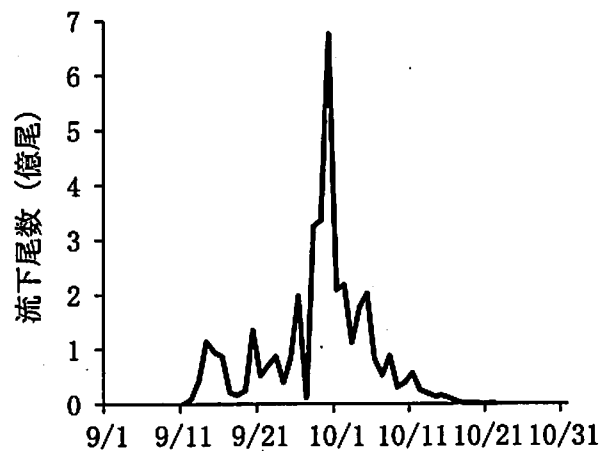


図5 ふ化したアユの人工河川からの日ごとの流下量

(3) アユの総流下量

- ・ 総流下量は128億尾で平年比52%であった（昨年は平年比19%）。

天然河川からの流下量： 90.2億尾（平年値222.8億尾）*
 人工河川からの流下量： 37.8億尾（平年値 24.0億尾）
 総流下量： 128.0億尾（平年値246.8億尾）

*産卵量は45.1億粒（平年値111.4億粒）であるが、産卵量の2倍のアユが琵琶湖へ流下することが過去の調査でわかっている（産卵調査では河川の全域を調査することができないため）。

(4) アユ稚魚調査での採捕尾数

- ・10月は189尾/曳網で平年比212%、11月は28尾/曳網で平年比43%、12月は8尾/曳網で平年比29%となった（昨年の平年比は10月26%、11月37%、12月29%）。

*10月から12月に毎月1回、新月の頃に調査する(アユが表層に集まるため)。また、本調査で用いる曳網は、アユが成長するにつれて遊泳力が高まり採集されにくくなる特性がある。11月以降に採集尾数が減少したのはアユが成長に伴い採集されにくくなったことと、産卵時期が前期に偏ったため本調査の対象となる小型のアユが少なかったことが影響したものと考えられる。

- ・採捕されたアユ稚魚のサイズは、調査日の近い年と比較すると10月から12月すべての調査で大きめであった（昨年は平年並み）。

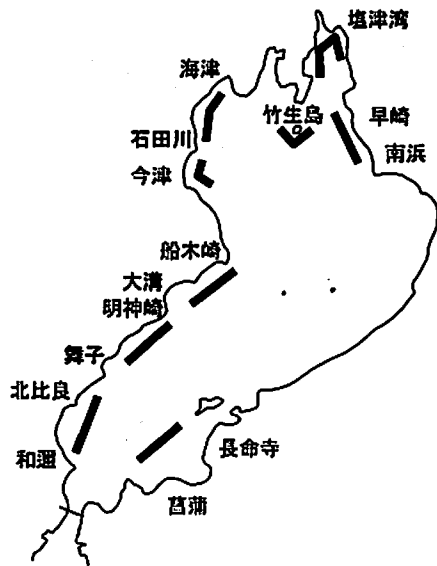


図6 調査水域



写真5 調査に用いる曳網と琵琶湖丸

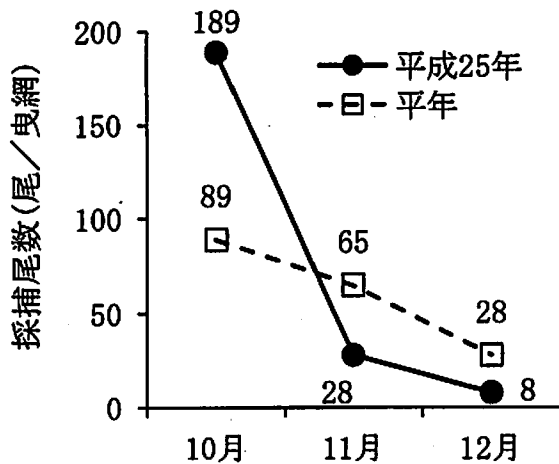


図7 採捕尾数の推移

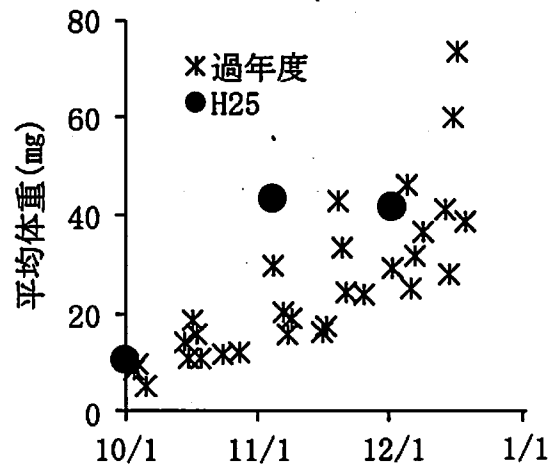


図8 調査日と平均体重の関係

3. 今後の調査計画

- ・アユの魚群数について、来年1月から8月にかけて毎月1回調査を行い、アユ資源の動向を注意深く見守っていく。